

海外登山の記録

中国 コングール峰北稜(1989年)

日時:1989年6月~7月

メンバー:塚本圭一(副総隊長)、他21名(京都カラコルムクラブ)

概要:1981年に3人の仲間を失った因縁のコングール峰に再挑戦した。北稜・傘岩までフィックスし、上部はアルパインスタイル。7月11日に登攀隊9名全員が登頂した。

記録

コングールへは遠い道であった。中国が外国隊に登山を開放したのが1979年で、許可願いを出し、コングール峰北面からの登頂が天安門事件の年、1989年であるから10年の月日がかかった。

1981年本隊、高田直樹隊長、学術調査隊:塚本、報道を含む総計20名で編成された。北稜隊の嶋満則、寺西洋治、松見新衛は帰ってこなかった。

1989年。総隊長谷垣禎一、小谷総隊長、塚本総副隊長、隊長安田越郎、登攀隊長須藤健志、隊員七名、松田秘書長、清水事務局長、報道、通訳、連絡官など22名の隊であった。

先に紹介したH. W. Tilman の『Tow Mountains and a River』には、1981年にコングール登山隊も高所順応で登ったムスタグ・アタの記事がある。

C. P. SKRINE『C. HINESE CENTRAL ASIA』(1926)には「PAMIRS QUNGUR MASSIF」の地図があって、QUNGUR II の位置も判る。扉にはキルギスの花嫁のカラー絵がある。もう一つ、SCHOMBERG『PEAKS & PLAINS of CENTRAL ASIA』(1933)の扉にも「A Young Turki Girl of Kashgar」と題する少女の写真がある。ページの中程にはカシュガルからのコングール II の写真もある。この二冊の本を手に入れたときは嬉しかった。この本を手にした多くの探検家の卵たちは私同様に遙かなるシルクロードに夢を持ったに違いない。

1980年に偵察に出かける前に、私が「どうもコングールの正しい写真が判らない」と言っていた時、高田さんは「よろしいがな中国へ行けばわかりますがな」と言う。もっともなことだが私が生まれて

間もない頃に本物のコングールを見ている人がいたのである。中国から送られてきた写真の中には本当のコングールはなかった。中国での文革による資料の喪失は大きかった。

1981年の痛恨の日に、中国登山協会の史占春主席は、小谷さんに「小谷さんのためにコングールは誰にも許可しません」という約束があったという。

そして、1989年、5月27日、谷垣さんは国会の事情で出国できなかったが、私と隊員9名は先発として北面からのコングールに向かった。ウルムチ、カシを経由してゲズ着。3600mにB. C. 設営。

私はK2方式のおもちゃのような気象観測場をつくり、観測を開始した。これまでの観測の経験を活かして、気圧、天気(5段階)、気温、雲量を重視し、日射量、最高最低気温も参考にした。この年はヒマラヤ一帯の天気が不安定で、各地で多くの隊が苦勞していた。

「キルギスの15日間」という伝説があるらしく、夏の日には15日の好天があるという。

そのことを信じている隊員もあった。隊員は7月2日から休養に入っていた。好天周期に入った7日にアタック開始、私は隊員に「好天は12日まで!」と言った。そして、11日9名が北面からの全員登頂を完成した。この登山でようやく私の気象観測も認めてもらった。

コングール登山でのタクティクスで考えることがある。私たちの1968年のカフカス登山の目的のもう一つにイタリアのトリノで開催される国際アルピニスト会議に誰かが出席することになっていたが、事故があったために出席できなかった。帰りのハバロフスクからの船中で会議に出席した RCCII の奥

海外登山の記録

山章さん(1925~1972)と偶然一緒になり、日本まで楽しく奥山節を聞くことになった。船中のバーでのヒマラヤ論議は、奥山イズムそのものであった。その時に話してくれた8000m級の山岳の登り方は1989年のコングールの登り方でもあった。ちょうど、奥山さんは1970年に「RCCII ヒマラヤ委員会」を立ち上げる前夜であった。奥山さんが話したことはいくつかの能力別のチームを組んで、それぞれの組が能力に応じて開拓し登攀するということである。コングール1989では、須藤登攀隊長が、厳しく自己管理を柱としての行動をとることを言っていた。コングール隊もヒマラヤ登山的チーム、アルプス的チーム、日本冬山的チームがあって、それぞれの能力を発揮していた。CII5300m-CIII6250m-CIV7500m-頂上までのルートもいろいろな能力を要求される。奥山さんも岩壁、氷壁などいろいろな場面での能力発揮を勧めていた。

(記/塚本)



↑コングールのパルナシウス

